法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

サミ・チャックの『マリ人、アリ・カポネ』を読む

元木，淳子

(出版者 / Publisher)
法政大学小金井論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
63
(終了ページ / End Page)
82
(発行年 / Year)
2012-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009079

サミ・チャックの『マリ人、アル・カポネ』を読む

元　木　淳　子

1：はじめに

トーゴ出身のフランス語表現の作家サミ・チャック Sami Tchak は、パリのアフリカ系移民の日常を描いた小説『お祭り広場』[1] (2001) における大胆な性描写で注目を集めた。ついで、作家は小説の舞台を南米に移し、『エルミナ』[2] (2003) で恋の道に迷う文学青年を描き、『仮面の祭り』[3] (2004) で、独裁制下の性と暴力を描いた。『いぬころ天国』[4] (2006) では、都市のスラムにおけるこどもたちの過酷な生活を描き、『メキシコの娘たち』[5] (2008) では娼婦の生を描いた。この南米シリーズによって、サミ・チャックは作家としての地位を固め、21世紀のアフリカ文学「新世代」作家の一人と評されるにいたった[6]。2004 年には作家の全作品に対してブラックアフリカ文学大賞が贈られ、2006 年には『いぬころ天国』がアマドゥ・クルマ賞を受賞している。このように、サミ・チャックは性の問題を追い、かつアフリカを舞台としない異色の作家として知られてきたのである。

ところが、最新作『マリ人、アル・カポネ』[7] (2011) は、マリを舞台としたアフリカ人の物語となっている。このアフリカへの帰還は、当然ながら批評界の関心を引いているのだが、その変化の意味するところを探るのが本稿の目的である。

2：サミ・チャックの人と作品

作家として、社会学者として

サミ・チャックは本名をサダンバ・チャ＝クラ Sadamba TCHA-KOURAという。1960 年にトーゴ中部のカモンダ＝ボウンダ村に生まれたコトコリ人である。近隣の都市ソコデで高校生活を送り、小学校教師をつとめた後、首都ロメのベナ

ン大学で哲学を修め、ソコデ高校の哲学教師となった。

1986年にフランスへ留学し、パリ・ソルボンヌ大学で社会学の博士号を取得。以来パリに在住し、作家として、社会学者として活動している。

1988年、小説『不実な女』[8] を実名で発表。一夫多妻のコトコリ社会で結婚を強いられた娘の苦境を描いた。

1990年から1992年にかけて、博士論文のためにブルキナファソで農村の灌漑事業について調査した。研究成果は1995年『ブルキナファソにおける農民エリートの形成』[9] として発表された。ブルキナファソでは、当時問題化していた首都ワガドゥグにおけるトーゴ人女性の売春についても調査した。これについては、『アフリカにおける女性の性』[10] (1999)で報告されている。この研究書はペンネームで発表され、以降、著作にはサミ・チャックの名が冠されるようになった。

1996年、「共産主義の危機と売春」というテーマで、キューバへ調査に赴く。ここで南米諸地域について認識を深め、アフリカ人留学生の実態も知った。この時の調査は、『キューバにおける売春』[11] (1999)としてまとめられた。

2001年、『お祭り広場』が発表される。移民二世の青年がその暮らしぶりを語るものだ。「お祭り広場」を意味する原題の *Place des Fêtes* は、パリのアフリカ人移民地区にある、実在する地下鉄の駅名である。

一方、キューバの経験から一連のフィクションが生まれた。キューバを思わせる国を舞台に、美少女エルミナに恋する作家志望の青年の彷徨を描いた『エルミナ』、独裁国家を舞台に、政治家の愛人となって権勢をふるう美女とその家族の葛藤を描いた『仮面の祭り』、コロンビアを思わせる国の都市スラムで性と暴力に明け暮れるこどもたちの凄惨な日常を描いた『いぬころ天国』、メキシコを舞台に、自ら娼婦の道を選んだ娘の人生を、作家が聞き書きしていく『メキシコの娘たち』である。

そして、2011年の『マリ人、アル・カポネ』には、作家がジオ誌の依頼で行った、ユネスコ無形文化遺産に指定されたソソ・バラとよばれる楽器についてのルポルタージュの経験が多く反映されている。

このように、作家は自身の体験を小説や研究書に多く結実させてきたといえる。

3：主要な作品

（1）原点としての『不実な女』

作家の原点といえるこの小説が執筆された動機を、『アフリカにおける女性の性』の序文で見ておこう。

変身 métamorphose のテーマ

「変身」は、サミ・チャック文学のキーワードの一つだが、序文には、女性の変身ぶりについて青年サダンバが強い印象を受けたことが記されている。

青年時代、サダンバはロメなどの都市と実家の村を往復して、多様な文化や価値観に触れた。そのなかで、一夫多妻でイスラム教色の強いコトコリ社会の伝統的な結婚観を相対化して考えるようになったという。村の娘たちも同様で、一様に伝統への批判的な視点を培っていた。だが、その対応はまちまちで、都会的に変身していく娘たちがいる一方で、伝統的な結婚を受け入れる者もいた。結婚前に町で長期間を過ごし、その間村の規範から逃れて性的に自由にふるまう者もあった。結婚後に、多額の金が入用になって外国へ働きに出る女性たちもいたが、彼女たちが町に出ると、身なりや考え方が変化して、夫や義理の親に従順であるとは限らなくなったという。

アゲゲの女

サダンバがロメで大学生活を送っていたとき、多くのトーゴ人女性が、当時金儲けの天国と考えられていたナイジェリアで出稼ぎ売春をしていた。

1983年、ナイジェリア当局は不法入国の外国人を本国に追放。トーゴではアゲゲ現象として報じられた。アゲゲとは、ナイジェリアの都市ラゴスの郊外で、トーゴ人女性が多く居住していた地区を指す。追放されたトーゴ人女性の中には、ナイジェリアで不品行な行いをしたという意味で、「アゲゲの女」とレッテルを貼られる者もいた。ロメの港やバスターミナルで、トラックや舟に「積まれて」送還されてきた女性たちをサダンバは目の当たりにした。ナイジェリアですべてを奪われて、女性たちは泣いていたという。

国内でもとりわけコトコリ人に出稼ぎ娼婦が多かった。当時のコトコリ人閣僚は、これら同朋の女性たちを「民族の恥」だと罵り、屈辱的な仕打ちをした。ソ

コデの建物に、彼女たちを囚人のように閉じこめて、その頭を丸刈りにしたのだ。夫や親たちは、卑しい遺失物でも取りに行くように彼女たちを「受け取りに」いったという。だが、女性たちの大半が、家計のために身を危険にさらして働きに出たことは誰もが知るところだった。彼女たちの労働条件は厳しく、アルコールや麻薬に逃げ込んだ者もいる。中絶して死亡する場合もあった。そんな女性たちに社会は道徳的な非難を浴びせた。イスラム指導者のなかには、「未婚のアゲゲの女は不浄である」として埋葬を拒否する者さえあったという。日本の「からゆきさん」に対する社会の仕打ちを思い起こさせる事件である。

ところで、「アゲゲの女たち」の多くは、ナイジェリアで二人目の夫や愛人を持った。ナイジェリアの夫や愛人との間にこどもができた場合、女性がトーゴに連れ帰って、実家の親や夫に預ける場合もあったし、ナイジェリア人の父親にこどもを託して女性ひとり去る場合もあった。その結果、従来のトーゴ社会にはなかった一妻多夫が出現したのだった。

だが、だからといって、男たちが彼女たちに石を投げることができるのか、と作家は問う。コトコリ社会の男たちの中には愛人を持つ者もあり、既婚の女性に言い寄る者もいる。そんな男たちが、アゲゲの女たちの「性的不品行」を断罪することができるのか。彼女たちは、一般男女の性的無秩序の誇張された形を示しているにすぎない。多くのトーゴ人女性が、売春という形はとらずとも、自分の身体を交換貨幣として使用せざるを得ないのが現実である。こうして、売春と、ある種の性的自由とは分かちがたい状態にあるとの認識に立った作家は、娼婦をもはや「いまわしいくず」などとは見なさなくなったという。

以上のような体験をもとに、女性たちに科せられた惨めな境遇を告発するために、『不実な女』は書かれた。自らの性を手段として生活を切り開いていこうとするコトコリ女性が主人公に設定され、一夫多妻や出稼ぎ売春の問題が批判的に語られている。小説を出版した新アフリカ出版は、サダンバを「ニグロアフリカ文学における数少ない男性フェミニスト作家の一人」とうたった。

のちに作家は、『不実な女』を「男は加害者で女は犠牲者という、いささか単純な善悪二元論に立った作品だ」と自ら批評しているが、いずれにしろ、この「戦闘的な」小説は、コトコリの男性知識人の一部から激しい批判を浴びた。「よき作家ならば、自分たちの社会の特質を称揚すべきであろうに」民族の名誉を傷つけたと非難されたのだった。

この故郷での不評は、のちの作家活動にどのような影響を与えたのだろうか。

『不実な女』以降も、作家が女性の性に対する関心を失うことはなかった。次なる小説『お祭り広場』でも、主人公の母親像を通じて、再び出稼ぎ売春の問題が語られることになるだろう。

一方で、この小説以降、作家の故郷はおろか故国トーゴでさえも、作品から姿を消す。その理由を推論する手がかりとして、トーゴの言論事情を見ておこう。

トーゴは19世紀末ドイツ保護領となり、第一次大戦後は、英仏委任統治領とされた。フランス領は1960年に独立。1967年、北部出身の軍人ニャシンベ・エヤデマがクーデタで政権を奪取し、以来アフリカで最長とされる40年近く、元首の座にあって、事実上の独裁体制を敷いた。2005年にエヤデマが病死したのちは、息子のフォール・ニャシンベが大統領職を継いでいる。

トーゴにおける厳しい言論抑圧の状況は、アマドゥ・クルマの小説『野獣の投票を待ちながら』に詳しい。サミ・チャックの他に、トーゴの新世代と呼ばれる作家として、コシ・エフイ Kossi Efoui(1962－)やカンニ・アレム Kangni Alem (1966－)らがいるが、前者は80年代の学生運動の際、激しい迫害を受けてフランスに亡命した。後者は、ラジオ局で働いていたが、1992年に政治的理由で追放され、同じくフランスに亡命している。

『不実な女』への攻撃について作家は多くを語っていないが、イスラムの名を借りて男性の特権を乱用する男性中心社会を公然と批判したこの小説が、国内の反動的男性支配層を刺激したことは想像に難くない。

次なる小説『お祭り広場』は、このような祖国の言論事情に対する作家の一つの回答といえるのだ。

（2）『お祭り広場』

小説の冒頭、主人公の若者は、自分たちの「展望のない人生 vie sans horizon」[(12)]について語ろうと言う。若い娘の肉体を資本にして暮らしを立てていた主人公が、従妹との愛に目覚めるまでが描かれる。

主人公の両親は「あっちの国で生まれた」[(13)] 黒人である。主人公自身はフランスで生まれ、パリ郊外の移民居住地区に暮らしていた。が、郊外の住所では将来の妨げになるという父の忠告を受け入れて、都心で一人暮らしを始める。妹二人はオランダで娼婦をしている。

主人公は、父親たち移民一世の世代を鋭く批判する。父親はいつか故国に戻って、そこで葬られたいと望み、こどもたちにも故国でクラン（氏族）の名を継いで欲しいと願っている。が、主人公は、父の故国など死に瀕し、恥そのものではないかと手厳しい。一方、主人公にとってはフランスも、生まれはしたが血のつながりはないので、祖国 patrie ではないという。父は一旗揚げようと渡仏したが夢破れ、今は宝くじや占い師にすがっている。うまくいかぬことがあると人種差別のせいにするが、そういう父自身も、ユダヤ人やアラブ人、なにより故国の南の出身者を警戒しているのだ。

父はやがて性的にも不能となり、母は多くの愛人を持つことになる。数々の恋の凱歌をあげる母を主人公は愛している。ある時、メトロのプラス・デ・フェット（お祭り広場）駅で、主人公は母に結婚前の性について問う。母は、町で変身を遂げ、ナイジェリアで出稼ぎをしていたが、追放されて「アゲゲの女」とさげすまれ、再びブルキナファソで娼婦をしていたと語る。

思春期の頃主人公は、「マリ人の友人の従妹」と性関係を結び、界隈の秘密に分け入って、貞淑と評判のギニア人妻の不倫や、ポルトガル人父娘の近親相姦などを目撃する。だがまもなく主人公も不能となり、熱愛する「マリ人の友人の従妹」から疎まれる。妹との近親相姦の結果なんとか立ち直り、性はすべての禁忌を越えると考えるにいたるが、その時熱愛する娘はすでに主人公から去っていた。

ついで主人公は、父が故国から呼び寄せた弟の長女、つまり主人公の「従妹」と関係を持つ。ある時、この従妹は、ゆきずりのユダヤ人弁護士に裸の写真を撮らせて大金をせしめたことをきっかけに、スターになるという大望を抱く。そのためには売春もいとわないと言う従妹に、主人公は自室を提供し、加虐趣味の日本人客などを招き入れる。

主人公にはさらにひとりの「姪」がいる。血のつながりはないが、同じクランの出なので慣習的に「姪」とよぶ娘である。ある日突然学業を放棄して、姿を消すが、シングルマザーとなって再び現れ、時々主人公の実家で家事手伝いをしていく気だてのよい娘である。

主人公はこの「姪」と「従妹」と三人で、「反差別協会」なる売春グループを作り、ネットサイトを立ち上げる。と、そこへ上品な白人の老人が尋ねてくる。男はアフリカで暮らした経験があり、反人種差別主義者として、あらゆる倒錯的快楽を試みてきたなどという。男は「姪」を気に入り、彼女の幼い息子も厚遇する。

一方、「従妹」は、スターになるためのコネを得ようと、「姪」からこの裕福な老人を奪おうとするが、老人には「姪」しか眼中にない。自分の容姿に自信のあった「従妹」はショックを受けて引きこもり、やがて姿を消す。従妹がいなくなって、主人公は彼女への愛に気づく。娼婦として街に立ち、あげくに殺されたという噂を聞いて、主人公は探し回るが、幸いにもそれは誤報だった。

主人公の両親は、従妹との関係は伝統社会では近親相姦にあたると反対する。死期を悟った父はひとり故国に帰り、誰にも顧みられることなく死ぬ。性的魅力を失った母は、生きる屍となってフランスで孤独死する。そして主人公は、「祖国から遠く離れて」と歌うチュニジア系の歌手ラアムの声を、フランスで、「従妹」と従妹に宿ったこどもとともに聞くのだった。

『不実な女』に始まる「性」と「変身」のテーマは、『お祭り広場』では、あらゆるタブーを踏み越えて性を追求する人物たちの姿を、大胆な性描写でとらえるという形で展開されている。女性たちが、性の主体としてたくましく生きる様が肯定的に描かれているのだ。性の快楽を求める主体としての女性像は、カメルーンの女性作家、カリクスト・ベヤラのそれに近い。また、親子関係として、性的魅力にあふれた母親を誇りに思う主人公の姿が描かれているが、娼婦の母を慕う息子像は、アフリカ文学においては新しいといえる。この息子の姿は、のちの小説『仮面の祭り』や『いぬころ天国』などにも引き継がれてゆく。

ところで、『お祭り広場』では、マリ、セネガル、ブルキナファソ、ナイジェリア、ニジェール、ガーナ、コートジボワール、ギニア、レバノン、フランス、ドイツ、オランダ、ポルトガル、日本などの国名は書き込まれるのに、トーゴの名はまったく現れない。また、登場人物の名前も年齢も記されない。

この意識的な匿名性は、かえって、主人公の両親の故国についての読者の詮索心を刺激する。限りなくトーゴの方に読者の目を誘導しながら、決定的な言質は厳に与えない、という仕掛けによって、『不実な女』が蒙った攻撃をかわしているといえよう。

同時に、その強い匿名性によって、移民の問題が、特定の地域出身者の問題として限定されることなく、広くフランスにおけるアフリカ系移民の問題一般として受け止められる結果も導いているのだ。

なお、この小説では、主人公が「マリ人の友人の従妹」との叶わぬ恋に悩む次

第が書かれている。また、フランス人老人の姿を通じて、人が、仮面の下に、性的な禁忌にもかかわらず（あるいはそれゆえに）強い性的欲望を秘めていることが示される。この「不可能な愛」と「仮面」のテーマも、のちの作品で展開されることになるだろう。

（3）極限状況としての『いぬころ天国』

『お祭り広場』では、移民社会の貧困層が描かれたが、主人公が妻子とともに生きていこうとする幕切れに一条の光が射している。『お祭り広場』の冒頭に、主人公たちの世界が早すぎる死に満ち、その展望のない人生は、ついに狂気にいたるほどのものだとある。小説『いぬころ天国』ではまさに、この「展望のなさ」が極限にまで突き詰められる。安全や教育とは無縁の、生き延びるために戦うこどもたちの日常の凄惨さはたとえようもない。

舞台は、コロンビアの首都ボゴタを思わせる都市のスラムである。ゲリラ掃討の一斉射撃が日常という物騒な地区で、殺人、自殺、麻薬による変死にことかかない。サミ・チャックは、ボゴタについて、近代化が急激に進みつつある地区のかたわらに、うち捨てられたスラムがあり、その格差と暴力性はアフリカの都市の比ではないと語っている。タイトルの「いぬころ」とは、皮肉にもエル・パライソ（天国）とよばれるスラムで生きるこどもたちのことだ。複数の語り手が物語を紡いでいく。

主人公の少年エルネストは、一切れのパンを奪い合い、かっぱらいをしたり、やくざに盗品を売ったりして日々をしのいでいる。寝起きしている掘っ立て小屋には、母親のリンダが時々やってくる。エルネストは十代前半で、二歳年上の孤児ファニートには服従し、一歳年上の孤児リキとは順位を争っている。同年の少女ローラは売春をしている。少女は生気にあふれ、主人公にとっての救いだった。だがローラは主人公を翻弄し、ファニートらをそそのかしてエルネストの食べ物に毒を盛る。あやうく殺されかかったことを母親に告げると、母は量を間違えたねと言い放つ。主人公は激昂して、手にしたピストルで母親を撃つ。入院したリンダは、息子にはじめて自身の生い立ちを語る。

リンダは自分の父親を知らない。幼いころ母親と物乞いをしていて、金持ちの女に保護された。十歳の時、女の家からさまよい出て、中年男のエル・チェに助けられる。昼は都心のバーで、夜はエル・パライソの男の小屋で暮らしたが、年

月を経ても、エル・チェはリンダに触れようとしなかった。

ある時、御者のレオナルドが、リンダが唇から血を流しているのを見て欲情にかられ、彼女を自宅に連れて行く。男の部屋は血染めの衣服であふれていた。幼い頃、家族を皆殺しにされて以来、蒐集しつづけてきたというのだ。十六歳のリンダは男を受け入れ、エルネストを身ごもるが、レオナルドは雷に打たれて死ぬ。エル・チェも去っていた。エルネストが三歳になると、リンダはこどもを置き去りにして娼婦として町に出て行った。エルネストは孤児たちと生きるほかなかった。

エル・チェは裕福な家の出で、大学生の時、兄嫁のリディアに恋をした。その思いに気づいたリディアは、こどもほしさに義弟を誘惑する。リディアは妊娠し、生まれた娘をモナ・リサと名付ける。一方で、リディアは、エル・チェが暴行を働いたと夫に訴えて、彼を国外追放しようとする。だが、リディアのもとを去りがたいエル・チェは、エル・パライソに土地を買い、潜伏する。エル・チェはリンダに娘リサの面影を重ねたのだった。

一方、主人公はローラとよりを戻そうとする。彼女と結婚の血の誓いをたてていたとき、リキが現れて争いとなり、ローラは二人のどちらとも結婚すると告げる。だが、ファニートが現れるや、ローラは彼の胸にすがる。そしてファニートは、知り合いの女の家を借りて、ローラに売春をさせるのだった。

十四歳になったエルネストは、ある時、黒づくめの女性アーティスト、ルシア・アギレラに出会う。彼女は高級マンションに住んで、タールで人の顔を描いていた。ルシアに誘われて行ったアトリエで、エルネストはワインで酔いつぶれる。ルシアは飛行機事故で父と兄を亡くしたと語り、翌日、エルネストに服と金を与えて送り出す。だが、エルネストが友だちと再びマンションを訪れると、ルシアは彼を知らないと言い、ピストルを持ち出して追い払う。

混乱したエルネストが小屋に帰ると、リキとファニートが小屋のなかのものすべてを持ち去っていた。その時、小屋の壁がルシアの絵に変わり、アーティストがエルネストに殺すと迫ってきた。少年は叫びながら駆け出してゆく……。

今やエルネストは小屋に閉じこめられ、足を鎖につながれている。ファニート、ローラ、リキ、ルシアらが訪ねて来て、それぞれにエルネストに非道をわびる。エル・パライソにはいぬころだけがすむのだ、おれはいぬころだ、迷い犬だ、とエルネストはつぶやいている……。

遺棄されたこどもが正気を失う。その悲惨さは、トマス・アカレが『スラム』で描いたケニアの状況にも重なるが、希望のなさにおいては『スラム』もおよばない。少年たちは、少女売春を手段として自らの食を得、性を通じて生への執着を確認し、異性の支配をめぐって序列を決定する。性は生の根源であり、生そのものとなっている。

教育を受けず、貧しい話し言葉の世界で生きているこどもたちの声が、構文も崩れた、つぶやきのようなフランス語で書きとどめられ、時としておかしく、悲しく、また詩的に表現されている。『いぬころ天国』は、コロンビアの女性アーティスト、コンスタンサ・アギーレの絵画作品『無名の人々』に着想を得たとされる。小説中でルシアが描く顔の絵は、『無名の人々』そのものといえる。

『お祭り広場』では、登場人物に名前が与えられず、その無名性によって、フランスにおけるアフリカ人移民全般の生活が表象されていた。逆に、『いぬころ天国』では、スラムの「無名の人々」すべてに丁寧に名前が与えられている。『いぬころ天国』はアマドゥ・クルマ賞を得たが、クルマが、小説『アラーの神にもいわれはない』で、リベリア内戦におけるこども兵の生と死を悼むように、こどもたち一人一人に名前を与えたように、『いぬころ天国』でも、こどもたちの狂気に至る苦しみを記録し、記憶するためであるかのように、登場人物一人一人に名前が与えられているのだ。

（4）『仮面の祭り』

権力と性：『キューバにおける売春』

南米シリーズには、貧困層における性を描いた『いぬころ天国』がある一方で、独裁政治下での富裕層における権力と性を描いた小説『仮面の祭り』がある。『お祭り広場』で現れた「不可能な愛」と「仮面」のテーマは、ここで深められることになる。まずは、キューバでの学術調査をまとめた研究書『キューバにおける売春』と『仮面の祭り』との関係を見ておこう。

『キューバにおける売春』では、マクロとしての国家の政治経済情勢と、ミクロとしての個人の性の関係が、世界的枠組の中でとらえられている。とりわけ興味深いのが、キューバにおけるアフリカ人留学生と売春についてのレポートである。

キューバは、革命以降、ソビエト・東欧諸国の圧倒的な経済援助のもと、社会主義国となって完全識字率を達成し、売春も駆逐した。だが、80年代末のペレス

トロイカ以降、従来の援助が断たれ、グローバル化の波にもまれる。外貨獲得のために観光に力を注いだ結果、売春が復活し、エイズ感染の問題も含めて世界的な注目を集めるに至った。

ところで、90年代以前にキューバに留学していたアフリカ人学生は、潤沢な奨学金に恵まれ、葉巻などのキューバの産品を安く買い占めては、西欧に出かけて高値でさばき、また西欧で香水などを安く仕入れてはキューバで売って、懐を肥やしていたという。だが、90年代以降のアフリカ人留学生は羽振りが悪く、貧乏学生として娼婦たちからも人気がないと皮肉混じりに報告されている。

キューバでの調査で深められた、権力と性の関係についての認識は、小説『仮面の祭り』や『マリ人、アル・カポネ』に活かされることになるだろう。

『仮面の祭り』

南米の独裁政権下、美貌の女が政界の大物の愛人となり、家族を貧しさから引き上げ、自ら独裁者として家族に君臨する。ラテンアメリカ文学のマジック・リアリズムの影響を感じさせる、現実と幻想が交錯する文学世界の中で、悲劇が複雑に重々しく語られてゆく。

冒頭、主人公のカルロスが、高級娼婦アルベルタの私宅へ向かう。男たちがアルベルタを愛人にするだけで結婚しようとしないので、彼女は息子のアントニオを一人で育てている。カルロスとは前日出会ったばかりだが、アルベルタは生涯の伴侶にふさわしい人物だと感じ、その願いを伝えたいと思っている。それゆえに、事が終わってカルロスが支払いにと差し出した金を辞退する。

ところが、そんな女の気持ちを知らぬカルロスは、アルベルタの拒絶を、自分の性的能力に対する侮辱と受け止め、逆上のあまり彼女を絞め殺してしまう。それは、カルロスの、実姉カルラを殺したい、あるいはその身代わりとしてだれでもよいから女を殺したい、という内なる欲求の発露でもあった。

やがて、アルベルタの息子が帰宅する。最愛の母の屍を前にして、若者の顔は仮面のように無表情だ。謝罪するカルロスに、息子のアントニオは、まず母の財産を手に入れ、それから仇敵カルロスをなたで殺すと宣言する。カルロスは承知し、殺害に至った経緯をアントニオに告白する。

カルロスは、小さい頃から体つきも弱々しく、父から「ふぬけの恥さらし」と罵られてきた。一方、姉のカルラは全能だった。その美貌と肉体に男たちが群が

り、最初の愛人となった文化大臣は、彼女の気まぐれを満足させるため、生きたゴキブリを呑み込みさえしたのだった。カルロスは姉に嫉妬と羨望を感じる。

カルロスの家庭は貧しく、専制君主的な父が支配していた。だが、カルラのおかげで邸宅や車が手に入ると、父は娘に逆らえなくなっていく。家族の中で順位が入れ替わり、父親の横暴を厳しく批判してきたカルラが主導権を握る。権威を失った父は、近所のシングルマザーを愛人にして、妾宅の娘たちをつぎつぎに妊娠させる。すると彼は、界隈でなんと神のように崇められる存在となるのだった。

ある時、高級ホテルで名士の仮面舞踏会が開かれ、カルラは余興にと、カルロスに、女装してロサという女に変身するよう命じる。ロサになってみてはじめて、カルロスは自身の内なる同性愛嗜好に気づくのだった。だが、カルラはロサより遙かに美しく、カルロスはまたしても敗北感にまみれる。

舞踏会で、ロサはグスタボ大尉に見初められる。大尉は国家元首の側近で、元首の政敵を暗殺する下手人と噂され、おそれられる人物だ。深い教養と残酷さをあわせもった軍人にロサは魅了される。二人が会場から消えようとした時、カルラが現れ、事の真相を暴露する。大尉とカルラは、カルロスの眼前で情熱的に愛し合うのだった。

その後、大尉はカルラを国家元首に「献上」し、カルロスにも秋波を送ったあげく、カルラと婚約する。カルロスは女に対する嫌悪感を自覚し、カルラに殺意を感じる。姉の結婚式に出席することなくカルロスは外国に出て、数年がたった…。

カルロスとアントニオは死者の潟とよばれる場所にアルベルタを運び、立位のまま潟に埋める。身の上を語り終えたカルロスは、アントニオと最後の抱擁をして、首を切り落とされるのだった。

『仮面の祭り』でも「変身」のテーマが描かれているが、それまでの作品とは異なって、権力に触れて変身してゆく人間の姿が多く描かれている。独裁者をいただく国家では、家族のレベルでも、父親が独裁者として君臨する。国家の権力構造からこぼれおちる不正な利益に与った個人は、みるみる小元首へと変身していくのだ。このような独裁者が支配する国家には、栄光の過去もなく、未来の展望もない。独裁者の一族とその取り巻きたちが、国の富を犯罪的に乱費するために、政敵もまた、権力を渇望して暴挙に出たり、民衆が愚かな考えに惑わされたりす

るのだと述べられている[14]。

また、「不可能な愛」と「仮面」のテーマは、仮面舞踏会での女装という設定を中心に展開されている。仮面の下であらわになった、主人公の同性愛者としての軍人への思慕と異性への憎悪、軍人からの裏切り、アルベルタの主人公への思いなど、叶わぬ愛をあきらめきれない男女の錯綜する情念が描かれている。

4：『マリ人、アル・カポネ』

「変身」「仮面」「不可能な愛」のテーマは、小説『マリ人、アル・カポネ』においても引き継がれていく。

語り手のフランス人青年ルネ・シュランは、大手雑誌社の依頼で、ソソ・バラとよばれるバラフォンのルポルタージュのためギニアを訪れる。ソソ・バラとは、マリ帝国の創始者スンジャタの敵将にして、ソソの王スマオロ・カンテの精霊が、1205年に作ったとされる聖なる楽器で、マリとの国境に近いニャガソラで保存されている。ソソ・バラをユネスコ無形文化遺産に登録させた元外交官のナマヌ・クヤテがルネの案内役である。共同作業するフランス人写真家のフェリックスとは現地で合流する予定だ。

ナマヌは六十歳すぎの病身な男で、年若い妻のファトゥを熱愛しているが、彼女が近所の青年に心を動かしているのではないかと苦悩している。ナマヌは祖国を心から愛し、西アフリカの伝統の神髄をルネに伝えようとする。

ニャガソラに着くと、取材への謝礼をめぐって、フランス人たちとナマヌの間に葛藤が生じる。そこへ、「カンカン・ムッサのこどもたち」という、フランス在住でマリ人の親を持つこどもの会のメンバーが、ソソ・バラ見学に訪れる。会の代表は、アフリカ文学博士で失業中の26歳の美女ビネトゥ・ファールである。彼女の父はセネガル人の教師、母はマリ人の公務員で、ともにマンデ人だ。兄は日本人と結婚して、日本でマンガの翻訳をしている。

紆余屈折をへて、一同はようやくソソ・バラと対面する。ナマヌは感無量の様子だが、フランス人たちにとってはただのバラフォンにすぎない。そこへ、カメルーンの王子エドモン七世とグソ王女と名乗る二人連れが豪奢なリムジンで現れて、法外な額の寄付を差し出す。そのため特別に、聖なるバラフォンが演奏されることになる。美男美女のカップルにルネは魅了される。

突然の祝い事の出現に村中が踊り興じる中、王子がビネトゥに近づき、口から

白い鳩を出して驚かせるや、マリの首都バマコで待っているとささやく。見とがめたナマヌに、王子は、バマコのテレビ・ニュースでビネトゥがニャガソラに来ることを知り、追ってきたのだと打ち明ける。ビネトゥは王子の申し出を受け入れ、ルネも一行に合流しようと、バマコのホテル・マンデに向かう。

だが、ホテルでルネは、件のカップルが、実はカメルーン人の悪党だったと知る。男は、アル・カポネことジョゼフ・タワといい、マジックもこなす。女はシドニーという。二人は数年来トーゴのロメに暮らし、バマコには数週間滞在しているのだという。金ばなれのよいカップルはホテルでの評判も上々だ。特上シャンペンと性に溺れる登場人物たちの奇妙なホテル暮らしが始まる。

ルネはフランスの地方の出身だが、ジャーナリストを志してパリに出て、狭いスチュディオで孤独な一人暮らしを続けてきた。ホテル・マンデでは、逗留者たちの打ち明け話につきあわされる。ルネは、アル・カポネ、略してアルに親しくされたり、冷たくされたりと振り回されながら、次第に彼の虜になっていく。

アルはビネトゥに耳目を驚かせるような贈物をして、自分に従うよう命じ、ビネトゥはアルと関係を結ぶ。

まもなく、ホテルにナマヌが現れる。アル・カポネが王子と偽ったことをわびると、老ナマヌは、公衆の面前でアルの所業を伝える歌を即興で吟じる。アルとシドニーはいたたまれず、トンブクトゥへと旅立つ。

ほとぼりのさめた頃、アルは再びホテルに現れて、ルネに自身の来歴を「血の言葉 verbe de sang」[15] で語った。ルネは、アルの話に心を奪われ、自分がアルの一部になったように感じるのだった。

アルはバミレケ人。大学で哲学を学んだという。23歳の時、ドナシアン・コアニェに心酔し、ドアラでフェイマン（国際詐欺）ナンバーワンといわれたコアニェの仲間に加わり、アル・カポネと渾名される。

コアニェは、白紙から紙幣を作り出すといったマジック・トリックを用いるなどして、マンデラ、エヤデマ、モブツ、コンパオレ、サス＝ゲソなどアフリカ諸国の元首を手玉にとり、アメリカ、フランス、日本の実業家や西欧諸国の秘密情報機関と通じて、国際詐欺を行ってきた。カメルーン政府の諜報部に守られ、ファルコン50を所有するなど羽振りを利かせていたコアニェだが、1994年、イエメンで逮捕されて、獄死した。

コアニェ亡き後、ジャンヌ姫とよばれたコアニェの妹が跡を継ぎ、アル・カポ

ネは、姫を熱愛し献身を尽くした。姫の計らいで、アルも邸宅やホテル、ナイトクラブなどを所有し、ロメに財を蓄えるにいたる。また、姫の差し金で、アルは政治家フレデリック・ワンベベンの元妻の情人となる。フレデリックはアルに、シドニーの父で実業家のシャルル・ガブを紹介し、三人はドアラで起業する。シドニーはかつてフレデリックの愛人だったが、その後、老政治家は彼女をアルに与えるのだった。

やがて姫は、アルとは別の男と結婚すると宣言。逆上したアルは、姫を暴行し、二人の関係は破綻する。

このころ、法律で同性愛が禁じられているカメルーンで、政財界の同性愛者50人のリストがマスコミに流されるという事件が起こる。さらに2001年、当時のビヤ大統領が、専用機「ペリカン」号にかわって、「アルバトロス（あほうどり)」号の購入を希望し、不正な資金でボーイング767を調達した。だが、これが老朽機で、購入早々に炎上。大統領暗殺計画も取り沙汰されて調査が開始された。フレデリックとシャルルはこれら一連の事件に巻き込まれて捕えられ、アルとシドニーはロメに逃れた。

その時、ジャンヌ姫殺害のニュースが入る。姫らコアニェの残党が、ウラニウムの密貿易、偽札事件、資金洗浄に関わっていたとも報じられた。永遠に失われた姫を、アルは恋い慕い続けることになる。そのジャンヌ姫にビネトゥが生き写しなので、アルはどうしてもビネトゥを手に入れたいのだ。

そして、アルはビネトゥに求婚する。ビネトゥは、シドニーもまきこんで何かしら悲劇が起こる予感がすると言い、ルネに、一緒にロメに来て、なりゆきを見ていてほしいと懇願する。アルが贅沢な暮らしを保証してくれるから、雑誌社との仕事の約束は反故にして、一緒に人生を楽しもうと提案するのだ。だがその直後、アルはビネトゥを置き去りにして、シドニーとシカゾに行ってしまう。ビネトゥは、心の傷を癒すためにルネを求め、二人は心穏やかに暮らし始める。だが、その矢先にアルが戻り、ビネトゥは再びアルになびいてしまう。

一方、ホテルにはファンタ・ジャロと名乗るマリ人の娼婦がいて、ルネを見かけると必ず片言のフランス語で話しかけてくる。二人はベッドをともにしたこともあるのだが、ファンタは神出鬼没でつかみどころがない。ルネは、つねづねホテルでの彼の動静を逐一アルが承知していることをいぶかしく思ってきたのだが、実は、ファンタは、アルを崇拝するスパイで、カナダ国籍の26歳のＳＥだったと

知らされる。彼女こそ、アルの数ある「仮面masque」[16]のなかでも、最も強力で美しい仮面だったのだ。ファンタも、アルとともにロメへ行き、事態を最後まで見届けるのだと言う。そして、アルがルネも彼地へ連れて行きたがっていると告げ、それはルネが女のような「ふぬけ homme mou」[17]だからだと言う。

その時ルネは、アルが自分を取り巻きの一人にしようと決める前から、すでに彼に征服されていたのだと思い知る。ルネは、「老いた犬のようにおとなしく」[18]アルたちについていく。ルネ自身驚いたことに、自分がアルたちの手中にあるちっぽけな玩具であることに、喜びを感じているのだった。彼らの決定や欲求に合一すれば、自分自身で決定したり、欲したりする必要がない。自発的に従属することの喜びを知ったのだ。命じられるままに、ルネは、自分が仕事を放棄してアルについて行くことを母親と写真家に告げる。

その夜、夢にナマヌが現れてルネに別れを告げる。目覚めたとき、ルネの新しい人生が、抗いがたい、「果てなき罠 piège sans fin」[19]のように広がっていると思えた。青い水平線の彼方には、魅惑の人物、今や「我が主人 mon maître」[20]となったアル・カポネの姿があった。

変奏されるテーマ

新しい文体の追求は、サミ・チャックのすべての小説に認められる特色だが、『マリ人、アル・カポネ』では、民族や文化の異なる人々の話しぶりを活写する手法に磨きがかかっている。アフリカで話されているフランス語のみならず、グリオ（語り部）の民族語による語りなども、しばしばユーモラスな調子を交えてフランス語に写され、小説の最後では、フランス人のルネまでが、アフリカ的なフランス語を話し始めるのだ。

また、「変身」のテーマはここでも健在だ。ジョゼフ・タワは、コアニェに出会ってアル・カポネとして生まれ変わる。はじめは、アルに愛を感じていなかったビネトゥもやがては彼に降伏する。ファンタはアルの指示で娼婦に変身する。そして、孤独な主人公ルネも変身する。命をかけてアフリカの伝統を伝えていこうとするナマヌに共感しながらも、力と金と女を自在に操るアル・カポネに心を奪われ、自らすすんでその支配下に組み入れられていく。孤独な個人が主体性を放棄してカリスマに従属し、その共同体に参入していくのだ。

一方、『仮面の祭り』で提示された性と権力の問題も、『マリ人、アル・カポネ』

でさらに深められる。国家の富に群がる人間たちは互いに、利害と、しばしば性を介した人間関係とで結ばれている。その「闇ténèbres」[21]の有り様が具体的かつ多様に示されている。

さらに、「仮面」については、従来のように自身の内なる性的欲望を隠すためではなく、ここでは、積極的に他者を欺くための装置の意で用いられている。アル・カポネのスパイは、娼婦ファンタの仮面をかぶり、アル・カポネ自身も、マジシャンや王子の仮面を使い分けて世間を欺くのだ。だが、それでも人の心を完全に手中にすることはできない。「不可能な愛」は、アル・カポネのジャンヌ姫に対する情熱や、ナマヌの妻への愛の形で描かれている。

新機軸としての「現実性」

『マリ人、アル・カポネ』の新機軸としては、『お祭り広場』以来、アフリカ以外の場所に設定されてきた小説の舞台が、アフリカに回帰したことが挙げられる。そして、『お祭り広場』や『いぬころ天国』における実験的、挑発的な文体や性描写は消えて、全体としては写実的な文体に落ち着いた。さらに特筆すべきは、この小説が現実に起こった事件を実名でとりあげている点である。

すでに見たように、『不実な女』以外、サミ・チャックの小説は実際の事件や実名をほとんど用いていない。だが、この小説では、「事実は小説より奇なり」としかいいようのない事件が実名で扱われているのだ。アル・カポネが帰依した「ドナシアン・コアニェ」は、自らカメルーンの王を僭称して、国際詐欺団で暗躍し、イエメンで獄死した実在の人物である。また、「ジャンヌ姫」とよばれたその妹は何者かに殺害されている。政財界同性愛者リストが暴露された事件も、「アルバトロス事件」も実際の出来事である。無形文化遺産の「ソソ・バラ」も実在する。

さらに、この小説には「トーゴ」が再び登場してくる。すでに見たように、トーゴについては『お祭り広場』以来、それへの言及が厳しく自制されてきた。だが、『メキシコの娘たち』(2008)では、サミ・チャックの分身ともいえる「トーゴ人の作家」が登場し、娼婦たちの人生を聞きとる役目を果たす。そして、『マリ人、アル・カポネ』では、人物としては、コアニェと関係のあった前大統領エヤデマの名と、レストランのトーゴ人女将の姿とが記されることになる。また、地名としては、首都のロメがアル・カポネの逃亡先と設定されている。

『お祭り広場』では、登場人物に名前を与えないことで、無名の移民の現実が

表現されていた。『いぬころ天国』や『仮面の祭り』では、地名が特定されないことで、第三世界のスラムの現実や、独裁政治下での富の偏在が表される仕組みになっていた。

これに対して『マリ人、アル・カポネ』では、実在の国際詐欺団が取り上げられ、その中心部にいた人間として、アル・カポネという登場人物が設定され、彼がどのような人間関係を築いてカメルーン政財界に食い込み、周囲の人間を帰依させていったのかが描かれている。実際の事件に取材しているという意味において、この小説は従来に較べてより現実的になったといえる。

一方で、実際にソソ・バラを取材したサミ・チャック本人の分身ともいえる、だが人種も世代も異なるルネを語り手として設定したことによって、小説には強いフィクション性も付与されている。そもそもアフリカ文学において、フランス人男性が全編を通じての語り手として登場するのはきわめてめずらしい。植民地文学においては、フランス人の美男子が植民地へ赴き、「現地の悪漢」と戦い、現地の美女と恋をするといった筋書きが一般的だったが、『マリ人、アル・カポネ』はその植民地文学の裏返しともいえるだろう。

こうして、現実とフィクションを混ぜ合わせることによって、小説は、従来の作品より波乱に富んだ読み物となっている。さらに、小説世界では、実際の事件とフィクションの区別はなされておらず、不案内な読者にはすべてがフィクションであると読むことも可能な仕掛けになっている。実際の事件をベースとしながらも、小説はあくまでもフィクションとして読者を煙に巻く。そもそも『マリ人、アル・カポネ』というタイトルからして怪しく、いかがわしい。なぜなら、アル・カポネはそもそもアメリカのギャングの名であり、その渾名をもった登場人物はカメルーン人なのである。したがって、タイトルで示された「アル・カポネという名のマリ人」は、小説中には存在しない。実在の詐欺事件に関わった人物として設定され、タイトルすら欺くアル・カポネとはそもそも何者なのか。その「真実」はしいて明かされないまま、闇の世界にとどめおかれている。

5：結論

作家サミ・チャックは、自身の体験を核として小説を書いてきた。その意味で、作家の実生活と作品には呼応関係がある。トーゴでの生活から『不実の女』が生

まれ、フランスでの生活から『お祭り広場』が生まれ、キューバ滞在から一連の南米シリーズが生まれ、そして、マリでの取材から、『マリ人、アル・カポネ』が生まれた。したがって、『マリ人、アル・カポネ』もまた、作家の人生の旅程の産物なのであり、この小説におけるアフリカへの帰還は、将来にわたる作品の舞台の固定化を意味するものではないだろう。また、作家が一貫して追及してきた「変身」や「仮面」のテーマが、『マリ人、アル・カポネ』でも健在であるという点では、この小説は、従来のサミ・チャック作品の延長線上にあるといえる。

だが一方で、『マリ人、アル・カポネ』では、従来の作品とは異なって、題材として実在の人物や事件が実名で取り上げられている。小説の舞台として実際の地名が用いられ、登場人物の民族性や国籍も明示されている。さらに、作家の出身国トーゴについていえば、『お祭り広場』以降、小説におけるそれへの言及は厳に封印されてきたが、『メキシコの娘たち』から変化の兆しが見え始め、『マリ人、アル・カポネ』では、首都のロメが、闇の世界の住人を匿う地として描かれ、祖国に対する作家の視点が雄弁に表されている。このことから、『マリ人、アル・カポネ』は、サミ・チャック作品における新たなリアリズムの手法の到来を告げるものといえよう。

サミ・チャックは、「人がどうあるかではなく、ある一定の状況において、人はどうあり得るか、どう変わりうるかに興味がある」という。作品の登場人物が変身を遂げるように、作家もまた、新しい文体を創造しながら、作品ごとに変身ぶりを示してきた。アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカ各地で、作家は、どのような地にあっても生と切り離せない性の有り様を追求し、祖国の言論事情と切り結びながら、さまざまな手法で表現の自由を開拓してきた。その結果、作家として国際的な地位を確立したといえる。その変身の最先端にあって、作家が『マリ人、アル・カポネ』で示した新たな手法は、実際の事件や事実に触れても、一定の表現の自由と安全は確保しうるとする、作家としての自信のほどを示すものといえよう。

サミ・チャックは、「真の旅は、読書を通じて古今東西の人や物を尋ねることだ」とも語っている。従来、自らの作品の中で他の作家や作品について言及してきたサミ・チャックだが、『マリ人、アル・カポネ』でもアフリカ文学への参照が多く見られる。それぞれの状況の中で、言論と表現の自由を求めて闘ってきた幾多のアフリカ人作家とその作品を言挙げすることによって、サミ・チャックは、

独自の手法で、「闇」とその「果てなき罠」に迫ろうとする自身の決意を表明しているのかもしれない。

註

(1) Sami Tchak, *Place des Fêtes*, Paris, Gallimard, 2001.
(2) Sami Tchak, *Hermina*, Paris, Gallimard, 2003.
(3) Sami Tchak, *La Fête des Masques*, Paris, Gallimard, 2004.
(4) Sami Tchak, *Le Paradis des Chiots*, Paris, Mercure de France, 2006.
(5) Sami Tchak, *Filles de Mexico*, Paris, Mercure de France, 2008.
(6) in Notre Librairie, no 166 juillet-septembre, 2007.
Cultures Sudの特集「新世代の作家 25人」に、サミ・チャックの名が挙げられている。
(7) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011.
(8) Sadamba TCHA-KOURA, *Femme infidère*, Lomé, NEA, 1988.
(9) Sadamba TCHA-KOURA, *Formation d'une Elite paysanne au Burkina Faso*, Paris, L' Harmattan, 1995.
(10) Sami Tchak, *La Sexualité feminine en Afrique*, Paris, L' Harmattan, 1999.
(11) Sami Tchak, *La Prostitution à Cuba*, Paris, L' Harmattan, 1999.
(12) Sami Tchak, *Place des Fêtes*, Paris, Gallimard, 2001, p9.
(13) Sami Tchak, *Place des Fêtes*, Paris, Gallimard, 2001, p9.
(14) Sami Tchak, *La Fête des Masques*, Paris, Gallimard,2004, p72.
(15) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p187.
(16) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p295.
(17) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p295.
(18) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p296.
(19) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p298.
なお、*Un Piège sans Fin* はオランプ・ベリ＝ケナンの小説のタイトルである。
(20) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p298.
(21) Sami Tchak, *Al Capone le Malien*, Paris, Mercure de France, 2011, p164.